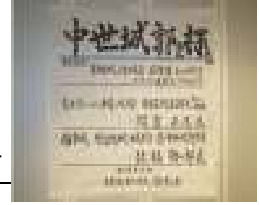


手賀沼が海だったころ

会創立20周年記念講演と朗読劇の集い

中世の城郭を探る ～東葛から常総へ



当会は1999年9月26日に設立され、この9月で創立20周年になりました。そこで、2019年9月22日(日)12時30分～16時30分、アミューズ柏プラザにて、「中世の城郭を探る ～東葛から常総へ」というテーマで当会創立20周年の記念行事を行いました。当日は、まずはふるさと舞台化プロジェクトによる「箕輪城の女城主・日女若ものがたり」の朗読劇、その後は講演会を開催しました。講師はお二人。間宮正光氏(日本考古学協会会員)と佐脇敬一郎氏(柏市史編さん委員会参与)で、お二人とも中世史、城郭研究の専門家です。

1. 当日講演会の様子など

平成16年に柏市文化財と指定された松ヶ崎城跡。文化財保護の各種活動や地域の皆さんのご尽力があって、この城は守られてきました。城跡を守る過程では、様々なことがありました。その保存を目的とした当会も、何とか創立20周年を迎えました。

今回、当会創立20周年記念として、研究者お二人にご講演をお願いし、東葛から常総、さらに他地域にまで、中世城郭はどのようなものかを考古学の立場から、城郭発達史の研究により考察するとともに、中世前期から戦国期の歴史を含めた興味

深いお話をうかがうことができました。

また、今回は縁あって、箕輪城を舞台とした日女若の物語を題材とした朗読劇が若い方々によって行われ、花を添えてくれました。この講演と朗読劇の集いはアミューズ柏プラザで開催されました。

この集いに84名の方が集まりました。東京、神奈川、大阪と遠くから見えた方もいて、質疑も活発に行われました。司会の富澤さんも、見事に仕切ってくれました。

また柏市教育委員会文化課長の吉田敬氏より考古学の古宮先生に連れられて松ヶ崎城跡に行き、「お前メジャー持って色々測れ」と古宮先生に言われて森の中を、木が鬱蒼とした中を走った昔話や保存問題が起きた時の話を含めた来賓挨拶を頂きました。

(主催者挨拶より)

「皆様、こんにちは。手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会の森です。今回20周年記念ということで、講演と朗読劇をさせて頂くことになりました。

(小略)

我々の会は1999年9月に創立しました。ちょうど20年ということになります。その間、保存の問題とか色々ありましたけれど、何とか持ちこたえて今日に至

ております。保存について、やはり文化財を守っていくということは、地域の歴史をよく知って、地域の自然や環境に親しんで頂くということが一番かなと思います。そういう郷土愛があるということが、バックボーンになるのではないかと考えております。

今日は最初間宮先生、その後佐脇先生の講演がありますけれど、そういうことを踏まえて皆さん聴いて頂ければと思います。また日女若の話は箕輪城を舞台とした朗読劇ですが、そういうことに若い方が注目されたのは良いことではないかと思っております。長くなりましたので挨拶はこの辺にいたしますが、皆さんのご協力によって松ヶ崎城も守られてきたと思いますので、今後とも一つよろしく願います」

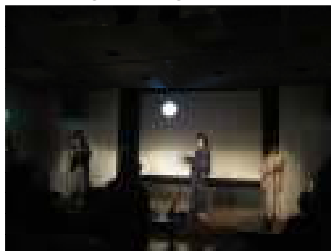
2. 朗読劇「箕輪城の女城主・日女若ものがたり」

今回縁あって、ふるさとものがたり舞台化プロジェクトの若い方々に、笹川臨風原作の戦前の小説「伝奇日女若」をもとにした朗読劇を行って頂きました。

当日の司会者の紹介:「今回この講演会に花を添えて頂きますのは、ふるさとものがたり舞台化プロジェクトの皆様です。朗読劇というのは、この会場にいらっしや

る皆様ほとんどの方が初めてご覧になると思います。今回演じて下さいます、ふるさとものがたり舞台化プロジェクトの皆様は、7、8年前から、このアミューズ柏の中で、柏市演劇祭というイベントがございまして、そちらの方にも出演されているということで、ご存知ある方もいらっしゃるかと思います。マイクの前で台本を手にしまして、朗読をするというスタイルなのですが、言葉から発する情報をもとに皆様が頭の中のスクリーンで、ストーリーの情景、そして場面を自由に描きながら、聴いていただくと楽しめるのではないかなと思います。

今回演じてくださいますのは、「箕輪城の女城主 日女若ものがたり」ということです。柏市箕輪にあった箕輪城を舞台に笹川臨風が書いた戦前の小説をもとに、若い皆様がフレッシュに演じてくださいます。この朗読劇の世界におそらく多くの人が、引き込まれていくのではないかなと思います。」



<朗読劇の様子>

3. 講演会の内容

講師の方のレジュメをもとに、講演の要旨を以下に記します。

講演会1「考古学からみた

東葛の城館 一発掘調査 20年の歩みと課題一

講師:間宮正光氏(日本考古学協会会員)

プロローグ:

昨今の戦国時代研究をみると、その対象は大名クラスから国衆へと広がりを見せ、生活・文化からのアプローチもなされるようになってきた。ここ東葛地域は、国衆及び土豪・地侍が活躍した土地である。まさに、格好の研究フィールドといえよう。ただ、残念ながら残されている古文書は少なく、文献資料のみからの地域史構築には限界がある。

そこで考古学の登場である。ここ数年遺跡の発掘件数は増加しており、それに比例して少ないながらも城館跡の発掘調査が行われている。それによると東葛地域の城館跡の多くは戦国時代に使用されていること。城館跡と一言でいっても、生活の場や、軍事的に特化した要塞であったり、多種多様な機能に分化し、水上交通と密接に関わりながら存在していることが明らかになってきた。まさにその多様性は戦国時代を物語っているのである。

本日は、その中で発掘調査の成果に基づき二つの視点から当地の中世城館を俯瞰してみたい。一つは戦国時代以前、とくに中世前半、鎌倉・南北朝期の居館についてである。この時期の手賀沼周辺は相馬御厨が立荘されており、そこを実効支配した相馬氏の居館跡はどこなのか。未だ謎に包まれて

いる。二つ目は掘り起こされた遺構から戦国時代の築城技術を導き出し、在地性あるいは帰属勢力が想定しうるかを考える。無論両者とも難しい試みであり、限られた資料、時間からは結論付けることはできないであろうが、令和という新しい時代へ向けて課題の提示を目指したい。

内容骨子

・東葛地域は、国衆及び土豪・地侍が活躍した土地。残念ながら残されている古文書は少なく、文献資料のみからの地域史構築には限界。考古学の知見が重要で、ここ数年遺跡の発掘件数は増加、少ないながらも城館跡の発掘調査が行われている。

→東葛地域の城館跡の多くは戦国時代に使用。城館跡も多種多様な機能に分化し、水上交通と密接に関わり存在。

・本日は、その中で発掘調査の成果に基づき二つの視点から当地の中世城館を俯瞰したい。

一つは戦国時代以前、とくに中世前半、鎌倉・南北朝期の居館についてである。この時期の手賀沼周辺は相馬御厨が立荘されており、そこを実効支配した相馬氏の居館跡はどこなのか、未だ謎。

二つ目は掘り起こされた遺構から戦国時代の築城技術を導き出し、在地性あるいは帰属勢力が想定しうるかを考える。

両者とも難しい試みで、限られた資料、時間からは

結論付けることはできないであろうが、令和という新しい時代へ向けて課題の提示を目指したい。

1 城館跡とは
城館跡は、中世の前半、鎌

倉時代から南北朝期の武士の拠点。

2 東葛地域の発掘調査
近年城館跡の発掘調査が進み、東葛でも会の大元になった松ヶ崎城跡(柏市)や

小金城跡(松戸市)、幸谷城跡(松戸市)など考古学的な調査が行われてきた。

*幸谷城跡(松戸市)は、幸谷城館跡(柏市)とは別の城



- 1 小金城 2 根木内城 3 栗ヶ沢城 4 前ヶ崎城 5 根戸城 6 増尾城 7 佐津間城 8 貫輪城 9 深井城
- 10 猪ノ山城 11 我孫子城 12 久寺家城 13 泉妙見山城 14 金山寺山城 15 藤ヶ谷城 16 高根城 17 松戸城
- 18 根本城 19 松ヶ崎城 20 幸谷城館跡 21 法華坊遺跡 22 羽黒前遺跡 23 手賀城 24 鷺野谷城 25 中峠城
- 26 幸谷城 27 恵井堀ノ内遺跡 28 花輪城

<東葛地域の城館跡の分布>

3 館の形態と課題

中世前半、手賀沼周辺には、相馬御厨という荘園が成立。相馬御厨を支配した相馬氏の館が当地にあったと考えられる。

東葛では武士の居館としては、思井堀ノ内遺跡が見ついている（相馬氏系の矢木氏の館跡とされる）。

相馬氏の館と比定された羽黒前遺跡など相馬氏館候補は種々あったが、確定していない。中馬場遺跡、法華坊館跡から検出された大規模な土塁・堀。柏市増尾の幸谷城館と増尾城の関係など、課題も多い。

4 中世後半の築城技術

中世の後半、戦国時代の築城技術について、堀のつくり方は障子堀、畝堀など様々なものがある。土塁もよく見ると、同じ城でも場所によって積み方を変えている例がある。また戦国期の終わり頃の高城氏支配地域には、櫓台状突出部という特徴ある構造がある。



<増尾城跡の櫓台状突出部>
『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第18集付図1を改変して間宮正光氏作成

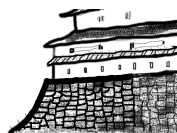
【課題】

城館跡を構成する施設の造り方、技術については、一般にはその家に保有された独自の技術で、極論すれば門外不出の最高機密と思われがちであるが、一方で、領主権力に縛られず、技術者は自由に活動したとする考え方もある。戦国大名クラスの大いなる家であれば技術の独自性も考えられるかもしれないが、東葛地域はそれほど大きな勢力は存在しない。ただ、独自の技術は別としても、よく使った、好んだ技術はあったものと考えられる。その分布を把握することは、支配地域あるいはその影響の範囲を知る手掛かりともなり、

さらに、使われた時期が押さえられれば、その城館跡の機能時期を知ることができるかもしれない。

【エピローグ】

駆け足ではあったが、東葛地域における考古学からみた中世城館跡の課題の一部を中世前半と後半にわけて概観してきた。表面観察によって得られる情報は貴重である一方限界もあり、発掘調査についても万能ではない。これからはより一層、文献史学、考古学、歴史地理学、美術史学、民俗学などが、学域を超えて協業することが必要で、それを行うことにより豊かな歴史像が結実されることと思う。



講演会2「柏市域・周辺地域の城跡に見る中世城郭の発達」

講師：佐脇敬一郎氏（柏市史編さん委員会参与）

はじめに

城跡の観察方法

- 城跡の基本構造を把握
＞縄張り図の作製
- 塁壁規模と城内・外の視界の確認
＞塁壁規模を他の城跡と比較
→柏とその周辺地域の城跡は、大きく三つ規模のグループに分類される。

第一グループ>小規模塁壁

土塁・堀の規模が現状で非常に小さい。城外より城内を見通せるものもある。

布瀬高野館跡

主郭は、周囲より一段低く堀込んだ区画。>台地整形区画。小規模塁壁が城内に散らばっている。

藤ヶ谷中上城跡

半島状台地に築かれた小規模塁壁を伴う城跡。主要部は消滅。

高柳城跡

「堂屋敷」の平場を中核として、周囲の丘陵高所に塁壁を置いた城跡。

松虫城跡 印西市

半島状台地を利用した城跡。高柳城跡同様、主郭は塁壁が築かれた地点より低い位置にある。

※『千葉県所在中近世城跡詳細報告書』1-84頁

鎌苅城跡 印西市

台地中央を方形に土塁・堀で囲み主郭となし、西に2郭、小規模な土塁・堀を伴う

外郭を残す。

相模 怒田城跡(吉井城山遺跡) 横須賀市

源平盛衰記巻 22、治承4年(1180)の衣笠城攻防戦にその名が見える。発掘調査により堀が検出され、上幅6.5m、堀底幅 3.2m、深さ 1.1~1.3mの規模であつた。

※『新横須賀市史』別編考古 511頁

相模 鎌倉字「獅子舞」推定城郭遺構東端堀切 鎌倉市

元弘3年(1333)の足利氏永福寺御所を防御する丘陵上施設の一つと考えられる。

下野 櫃沢城跡山上堀切

鹿沼市

永徳2年(1382)4月、小山義政の乱の際、義政が小山城より逃走し、立て籠もった糟尾城郭群の一つ。この月に落城。

武蔵 善応寺背後土塁・堀 坂戸市

文明9年(1477)川越城攻城軍の苦林陣跡であろう。

相模 七沢城見城台(ミジヨウダイ)遺構 厚木市

宝徳2年(1450)もしくは長享2年(1488)に当城で戦闘あり。小規模な堀切と数段の郭よりなる。七沢城本城は、医療施設建設のため消滅。当城は本城背後の山城。

※『厚木市史』中世通史編 364頁

甲斐 新城(大蔵経寺山)尾首堀切 甲府市・笛吹市

甲斐守護武田氏の川田御所詰城であろう。武田氏は永正16年(1519)甲府に館を移す。

※『甲斐の山城と館』上-343頁

仲山城跡 印西市

半島状台地を小規模土塁・堀で分断した城跡。市内にかつて存在した鹿島城跡(柏市鷲野谷)と同様な構造力。

武蔵 永田城跡 秩父市

仲山城跡と似た構造の城跡。秩父にはこのような小規模土塁の城跡が多い。

※『埼玉の城』161頁

武蔵 山崎城跡 滑川町

国営武蔵丘陵森林公園内にあり、東に開いた谷戸を取り囲むように土塁・堀が巡る。この城跡の周辺にも、小規模土塁・堀の城跡が見られる。山内上杉氏と扇ヶ谷上杉氏の抗争の際に使用された城跡力。

※『埼玉の城』138頁

第二グループ>中規模土塁・堀

増尾城跡

小規模ながら折れを2ヶ所持つ土塁・堀が城を囲む。

戸張城跡

半島状台地を二条の土塁・堀で分断した城跡

松ヶ崎城跡

単郭ながら、3ヶ所の虎口を持つ。

常陸 古徳城跡 那珂市

半島状台地を取り囲むように土塁・堀が巡らされ、その中を4郭ほどに分けて城となす。

『瓜連町史』等には、当城が永正年間(16世紀前半)に落城したとある。

※『図説 茨城の城郭』72頁

相模 大庭城跡 藤沢市

上面の広い半島状台地を4郭に大きく分割した城。16世紀初頭前後に扇ヶ谷上杉氏によって築城されたと考え

られる。

※『中世城郭事典』-326頁

武蔵 今井城跡 青梅市

16世紀前半、三田氏の居城勝沼城を防御するために築かれた力。

※『中世城郭事典』-326頁

武蔵 中城跡 小川町

増尾城跡同様、小規模単郭城跡ながら、周囲を囲む土塁・堀に折れが多用されている。

※『埼玉の城』121頁 同書では15世紀後半の城跡として

いる。

師戸城跡主郭 印西市

2郭・3郭土塁壁より規模が小さい。城内での古い段階の遺構の可能性あり。

※『図説 房総の城』106頁

常陸 小坂城跡 牛久市

比較的小規模ながら、4郭構成の半島状地形を利用した城。

※『牛久市史』原始古代中世 403頁

第3グループ>大規模土塁・堀

このグループに属する城跡は、柏市内に存在しない。

常陸 牛久城跡 牛久市

大規模な土塁・堀・岸が囲む戦国期最末期の城跡。天正10年代の対多賀谷戦に使用。

※『牛久市史』原始古代中世 383頁

常陸 東林寺城 牛久市

牛久城支援城郭。野口豊前守戦功賞書に、天正16年(1588)に戦闘があったとする。

※『牛久市史』原始古代中世 392頁

常陸 三条院城跡 つくばみらい市

主郭背後の堀だけ極端に規模が大きい。多賀谷vs後北条戦で使用されたと考えられる。

※『続図説 房総の城』232頁
常陸 伊佐津城跡 稲敷市
半島状台地を2郭に分割。非常に大規模な岸・堀を残す。2郭虎口に比較的大きな土塁あり。遺構の規模から、天正期の遺構を残しているようだ。

※『続図説 房総の城』236頁

師戸城跡 3郭北側土塁・堀
主郭の土塁・堀(写真 45)とは比べものにならない規模の土塁・堀が見られる。

主郭と3郭の土塁・堀とでは構築年代が異なるのでは？

守谷城跡 守谷市

下総相馬氏居城。徳川氏関東入部後も、対多賀谷氏の最前線城郭となる。

『図説 茨城の城郭』208頁

米本城跡 八千代市

下総西部で現存する城跡の土塁・堀の中で最も規模が大きいものようだ。

『千葉県所在中近世城館跡詳細報告書』1-134頁

北台城跡 香取市

高い岸で囲まれた小規模城跡。南西に近接する国分氏の居城、矢作城が天正3年(1575)になっても攻撃を

受けているために、その時期に構築された力。

三河 長篠城跡 新城市

天正3年(1575)に武田軍が攻撃、織田・徳川軍の後詰に助けられ、この合戦後廃城。

甲斐 小山城跡 笛吹市

天正10年(1582)徳川氏が国内に侵攻してきた北条軍を迎え撃つために築城。

※『甲斐の山城と館』上-370頁

甲斐 浄古寺城 山梨市

天正17年(1589)北条氏に備えて徳川氏が普請。

※『甲斐の山城と館』下-42頁

武蔵 滝山城跡 八王子市

北条氏照の居城。北条領内重要拠点の一つ。写真の規模の土塁・堀が約1km続く。

駿河 長久保城跡 長泉町

今川・北条と使用大名が替わり、最後は徳川氏の国境防備の城となる。残存常態は悪いが、大規模土塁が城内に散在している。

※『長泉町史』上巻 180頁

甲斐 御嶽山城跡 甲府市

天正10年(1582)甲斐での北条氏との戦いの際、徳川方が使用する。

※『甲斐の山城と館』上-274頁

おわりに

●3グループの該当年代。第一グループ>12世紀~16世紀 第二グループ>15世紀後半~16世紀 第三グループ>16世紀後半 ただし、この年代区分はあくまでも目安である。相模浜居場城跡(南足柄市)や上野真壁城跡(渋川市)のように規模的には第二グループだが、城が使用された時期は第三グループに属するものもある。

●第一グループから第二・第三グループへの進化。>12世紀末から16世紀末までに、急速に土木技術が発達。>城跡から中世400年間の社会の変化を見ることが出来る。

●地域単位での城の比較>どの地域にどのグループの城跡がどれだけ分布しているのか?>使用年代・使用状況を各地域で比較・考察。

●古文書・古記録によく城の名が見出せるのは第二グループの一部・第三グループで、第一グループの城跡は多くが、使用年代、用途が不明。>城跡からこの時期=12世紀末から16世紀前半の歴史を読み解く必要性あり。>城から見た柏の歴史



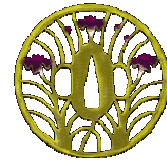
<増尾城跡主郭北西土塁(佐脇敬一郎氏撮影)>



<熱心に聞く来場者>

郷土史の窓

千葉氏と千葉・東葛(4)



4. 千葉氏と東葛

前述の通り千葉氏の本拠地は、千葉庄などであったことは間違いないが、同時に千葉氏は下総権介という国司として、下総国府のあった市川国府台など東葛との関わりが深い。ここでは、千葉氏と東葛との関わりについて、いくつかの側面から紹介する。

◆千葉氏と国府台

下総の国の政治上の中心は、古代は国府のあった、現在の市川中心部から北に位置する国府台辺りであった。国府の近くには、国分僧寺、国分尼寺があり、それらがあった場所は、後に述べる国分氏ゆかりの国分という地名で呼ばれている。現在ある真間山弘法寺も、国府台と一続きの台地上にあり、その台地の下の市川真間辺りは万葉集で詠われた真間の手児奈の伝説で有名である。

平安時代末期、関東では坂東平氏は着々と勢力を確立していったが、平忠常を祖とする千葉介常胤、上総介広常は、両総で勢力を伸ばし、平治の乱で源義朝が敗れた結果流されていた伊豆を脱出した頼朝を庇護した。治承四年(1180)頼朝の挙兵のおり、頼朝とそれに従う千葉介常胤がその六子を伴って参会したのも、下総国府

であったが、その9月17日の国府台の参会の際に、千葉氏が率いた総勢は三百余騎であったという。一方、上総介広常は二万の軍勢を率いて来たが、大軍勢を集めるのに時間がかかり遅参した。三百騎の軍勢しか集められなかったが、いち早く頼朝のために出陣し、頼朝の信任厚かった千葉介常胤に対して、上総介広常は大軍勢を率いて来たにも関わらず、のちに謀反の嫌疑をかけられ、頼朝に誅されることになったのは皮肉なことである。

鎌倉時代の下総国守護となった千葉氏の守護所は、国府台周辺にあったのは間違いないであろうが、それが具体的にどこなのかはよく分からない。しかし、千葉介常胤の子息で、唯一下総国府の近くに居住していた国分五郎胤通が「下総権介」であった常胤の手助けをしたとのことであるから、鎌倉時代に入ってから守護所の近くであって、何らかの支援をしていたとおもわれる。

さて、国府台の台地の南は、古代には前述した真間の手児奈で有名な、真間の入江になっていて、国府の津があったとされる。市川津の管理を国分寺の国分氏が行っていたことは、前述した通りで、その他国分氏は同時に守護所の事務を行っていたようである。

◆重要な相馬御厨をおさえた相馬氏

相馬師常にはじまる相馬氏が相馬郡を支配する以前から、相馬郡を千葉氏は支配し、重要な拠点としていた。それは平常長の頃に遡り、常長の子常兼から兄弟である上総介常晴に譲渡されたが、さらに常晴から常兼の子常重に相馬郡は譲渡された。その時常晴には常澄という実嫡子があったが、常重は常晴の養子になっている。

常重は大治5年(1130)、相馬郡にもっていた所領を皇太神宮(伊勢内宮)へ寄進し相馬御厨を成立させた。その御厨の範囲は、東は利根町の蛟(みつち)神社、西は常総市の菅生沼、南は我孫子市の手賀沼、北の境はつくばみらい市を流れる衣河(現在の小貝川)であった。

長承4年(1135)、常重は相馬御厨の下司職を子息の常胤に譲ったが、相馬御厨に課せられた公田官物の未納を理由に、下総国司藤原親通によって常重は召し捕えられた。藤原親通は常重に相馬郷、立花郷(東庄)を親通に譲るという証文を書かせた。さらに、常晴の子上総権介常澄まで御厨の支配権を狙い、康治2年(1142)には常澄からの要請をうけた源義朝は常重に圧力を加え御厨を奪い取り、

天養2年(1145)伊勢内宮へ寄進してしまった。

これに対して常胤は、久安2年(1146)国司対策として公田官物の未納分を国庫に納め相馬郡司に任じられた後、再度相馬御厨を伊勢神宮に寄進した。そのため、相馬御厨の下司職は源義朝と千葉常胤が競合することになった。常胤は常澄との対抗上、義朝と主従関係を結び、義朝を上級領主とし、「保元の乱」に際して、千葉常胤は常澄の子息上総介広常と共に義朝方へ参陣して、義朝を領家とした相馬御厨の下司職を確保したらしい。

また、上総介広常の弟に相馬九郎常清という「相馬」姓を名乗る人物がおり、上総系の相馬氏も相馬御厨の一部を領有していた可能性があり、事態は複雑であった。

源義朝が平治の乱で敗死すると、相馬御厨は国衙に収公され、このかつて藤原親通が常重に公田官物の未納を理由に書かせた譲り状をたてに、平家方である源(佐竹)義宗が相馬御厨の在地支配権を主張、永暦2年(1161)正月、御厨を伊勢二宮へ寄進した。

これに対抗して常胤も翌2月に再寄進するが、伊勢神宮は義宗の背後の平氏政権の威光を恐れ、義宗の主張が通って、千葉氏の手から相馬御厨は離れることになった。それが回復されたのは、源頼朝による、治承4年(1180)11月の佐竹氏征伐の後であり、常胤が忠誠を誓った源頼朝の力で相馬

御厨への支配権を常胤は再び得た訳である。

その相馬の地は、常胤から次男の相馬次郎師常に譲られた。相馬次郎師常は、常胤の子で一人だけ、名前に「胤」の文字がつかないが、当初は師胤というような名であったという。それが相馬御厨を継承した時に改名したようで、常胤以前の通字「常」の入った改名には先祖代々の重要な土地を相続したという特別な意味があるらしい。

相馬師常の子義胤が所領の大部分を相続し、以降相馬氏は相馬御厨の事実上の支配者として、繁栄した。相馬御厨が、香取の海、手賀沼の水運を利用して、現在の利根川下流域や江戸川流域とも交易が可能であったことも、一つの要因であろう。しかし、相馬氏の繁栄は分割相続が繰り返されたことや家督相続の争いから、次第に翳りがみえてくる。鎌倉中期、相馬胤綱の没後、未亡人である相馬尼は嫡子胤継を義絶(尼の子、胤村が多くを相続)、さらに、胤村の死後も家督争いが起った。

結局、胤村没後は五男の師胤が陸奥国行方郡内を譲与され、奥州に基盤をもった。師胤は、多くの所領を継承したが、それは当腹の嫡子であったためという。胤村の長子、胤氏は相馬郡内の所領を継承した。胤氏の子孫は下総に留まり、南北朝期には奥州相馬氏は北朝、下総相馬氏は南朝についたため、下総相馬氏は勢いを

失い、守谷を拠点としたものの、その他相馬郡に残存した所領に分散する。奥州に移った相馬氏からも相馬岡田氏など庶流が分立した。相馬氏の一族である戸張氏や、藤ヶ谷相馬氏(藤ヶ谷氏)は、戦国時代にも残ったが、後述するように別の土地に退転、または高城氏配下となった。



<相馬郡衙正倉跡想像図>
我孫子市 HP より

◆『鎌倉大草紙』に記述された千葉氏

あまり知られていないが、鎌倉時代の後期には、千葉氏の嫡流は現在の松戸市馬橋辺りに居住し、守護所での政務を行うとともに、鎌倉との往来をしていたらしい。その時期のことを含めて、千葉氏について室町時代末期の軍記物であると同時に歴史書である『鎌倉大草紙』が記述している。『鎌倉大草紙』には所々明らかな誤りもあるが、江戸時代の軍記物のような脚色にとんだ、殆ど架空の物語ではなく、ある程度歴史的事実を正確に伝えようと書かれているようである。

少し長いが、『鎌倉大草紙』から千葉氏の東葛に関する記述を引用する。

「此千葉介は平将軍村岡五郎*1重門末葉にて右大將頼朝の御時、当家の元祖常胤は鎌倉へ無二の忠節ありて将軍より御崇敬あり。官加階はあらざれども諸家の上座に列。一男新介二男相馬小次郎三男武石三郎四男大須賀四郎五男国分五郎六男東六郎大夫胤頼とて東ノ庄三十三郷を知行し代々歌人にて禁中の御会にも参りければ子孫代々在洛す。

常胤より五代の後胤に時胤は在鎌倉にて死去す。

六代の頼胤の時、総州小金*2に居住す。此時鎌倉極楽寺の良観上人を請て小金のまばしと云所に大日寺を建立して頼朝公より代々の将軍并千葉一門の菩提を祈る。貞胤の時、此寺を千葉へ移す。然ども大日五仏の尊像は良観の自作り給ひし靈仏にて威力新にして猶此所に残り給ふ間、其後、貞胤氏胤、当所に在城の頃、尊氏将軍の御菩提のため夢想国師の御弟子古天和尚を請じ此寺中興開山となし号万満寺。

此時、宗胤は三井寺にて討死し貞胤は北国落込は宮方にて新田義貞の御供にてありしかども不心して尊氏の味方になりける間、宗胤の子息胤貞宮方にて千葉残り給ふ。

此人の子息日祐上人法華学匠にて下総中山の法花寺の中興開山なり。是により胤貞より中山の七堂建立あり。五重の塔婆をたてらる。其後、胤貞上洛して吉野へ参、征西将軍の宮御下向のとき御供して九州へ下り大隅の守に補任し肥前国をも

知行しけり。日祐上人も九州に下向して肥前国松王山を建立して総州の中山を引てすゑの世まで此所を中山と両山一寺を号す*3。

さて又、貞胤の子孫千葉へ移り此胤直まで五代也。尊氏の御時、千葉の家二方にわかれ宮方将軍方とてありしが宮方*4は九州へ下り其後、終に下総へわたり給はず。

関東は一統にてありけるが今度また馬加は成氏と一味して原是を主として千葉へ移り、千葉の跡を継げる。其後、原は小金の城に居住す。上杉より今度胤直と一所に討死ありし中務入道了心*5の子息実胤自胤二人を取たて下総国市川の城に楯籠て千葉又二流となる*6。]

引用者注:

*1 村岡五郎とは平良文のこと

*2 これは現在の小金より広い範囲を指し、馬橋を含む

*3 松王山とは松尾山光勝寺のことで、佐賀県小城郡にあり、鎮西本山と称する。文保元年(1317)、千葉胤貞によって創建されたといわれ、千葉胤貞の猶子である日祐を開山とする。千葉家の外護により14世智観院日円までは中山法華経寺と両山一主制であった。

*4 宮方(南朝方)とあるが、九州千葉氏は当初から将軍方(北朝方)であり、誤っている。宮方(南朝方)であったのは、下総千葉氏の方で、下総千葉氏は北陸で新田義貞の軍勢に合流しようとして、木ノ目峠で吹雪にあつて立ち往生し、北朝方

の斯波氏の軍勢に降伏して以来、北朝についた。

*5 千葉胤直の弟、千葉胤賢のこと

*6 千葉胤賢の子息、千葉実胤、自胤の兄弟は、逃れた香取郡多古を脱出し、市川城に立て籠もったが、古河公方足利成氏の軍勢に攻められ、実胤は武蔵国石浜(現在の浅草附近)、自胤は武蔵国赤塚(現在の板橋区赤塚)に逃れ、武蔵千葉氏として分立し、関東管領上杉氏の後援のもと、しばしば古河公方である下総千葉氏と戦った。

この『鎌倉大草紙』で記載されている「六代の頼胤の時、総州小金に居住す。此時鎌倉極楽寺の良観上人を請て小金のまばしと云所に大日寺を建立して頼朝公より代々の将軍并千葉一門の菩提を祈る」と文章にあるように、鎌倉時代後期の千葉頼胤は小金周辺のどこかに居住したらしい。この小金は現在の松戸市小金とその周辺の比較的広い範囲を指すようであるが、伝承では馬橋駅に近い松戸市二ツ木字三日月台に頼胤の館があったという。

三日月という地名は、通常そのような形の土地をさすというが、『松戸市史』によれば千葉氏の家紋である月星紋の月の形から三日月を地名にしたことが有力とされており、中世から「ミコツキ」・「ミコツイ」とも呼ばれ、後に訛って「ミコゼ」と変化したという。



<馬橋の三日月台周辺>

(歴史的農業閲覧システムの地図に文字入れ等行った)

しかし、千葉頼胤が構えた居館である小金屋敷は、戦国時代に舌状台地先端を区切って築城された馬橋城とは別であろう。馬橋城は遺構が残っていないが、古い地図やかつて遺構が存在したときの見聞記事から、明らかに舌状台地の先端を堀切で区切り、複数の郭が連郭式に存在した城であり、その立地・築城の仕方から、時代が下った戦国期の原氏・高城氏の時代の城と考えられるからである。

ただ、同じ台地に別に小金屋敷と称する中世の館があったことは十分に考えられ、それは三日月台のどこかであったかもしれない。蘇羽鷹神社に伝わる伝承のように、蘇羽鷹神社を鬼門

とし、万満寺を裏鬼門とした場所とすれば、三日月台あたりになる。その場所は交通量の多い道路と商業施設、住宅のある市街地であり、遺構は何一つ確認出来ない。

大日寺は、元は馬橋にあって鎌倉極楽寺の良観上人、すなわち忍性を開山として千葉頼胤が開創した寺で、南北朝期の千葉氏当主である貞胤の代に、現在の千葉市中央区印内の千葉神社の南側に移されたが、昭和20年(1945)空襲により焼け、千葉市稲毛区轟町に移転、現在は轟町にある。大日寺には千葉氏歴代の墓があるが、それらの墓は千葉山にあったものが移されたものである。

大日寺が移ったあとには万満寺があるわけであるが、千葉満胤が臨済宗の寺として再建したもので、市街地にあつて唐様の独特の山門が目立つ。この寺には、仁王股くぐりという珍しい風習があることでも有名である。その万満寺の檀家である三枝松氏の先祖について、千葉氏に関連する伝承がある。

すなわち当地に屋敷を構えたという千葉頼胤の孫、千葉貞胤について、『万満寺縁起』(昭和9年刊)によれば、貞胤が恒良親王を奉じて北陸越前木芽峠に進軍していたところ雪道に迷い、斯波高経の陣に踏み入り、心ならずも足利尊氏に降参した。正中4年(1348)正月、

北朝方に味方して楠木正行と河内の四條畷で戦い、その年の暮れに小金城(馬橋付近の中根城)に戻ったところ、城が荒廃して人影もない、その城主の姿に同情した近隣の農民が傍らの松の枝3つを折り重ねて、貞胤を憩わしめた。こうして貞胤は守護神妙見菩薩を背負って無事に千葉の館に帰るこ

とができ、貞胤は農民に「三枝松」の姓を賜った。以来、千葉の妙見社の祭礼に際し、馬橋の三枝松氏が開扉することとなし、明治初頃までその儀を続けていたという。この伝承では、千葉頼胤の孫、貞胤まで、当地の城(中根城が比定されている)の城主とされており、前記の『鎌倉大草紙』の「其後、貞胤

氏胤、当所に在城」という記述にも合うものである。

(参考文献)
『千葉氏 鎌倉・南北朝編』千野原靖方(1995)
『上総下総 千葉一族』丸井敬司著 新人物往来社(2000)ほか

(続く)

松ヶ崎城跡の野鳥

写真：荒井辰男ほか

松ヶ崎城跡の南側を流れる大堀川にはカルガモが泳いでいたり、カワセミも来

ています。松ヶ崎城跡でも野鳥を見ることがあります。

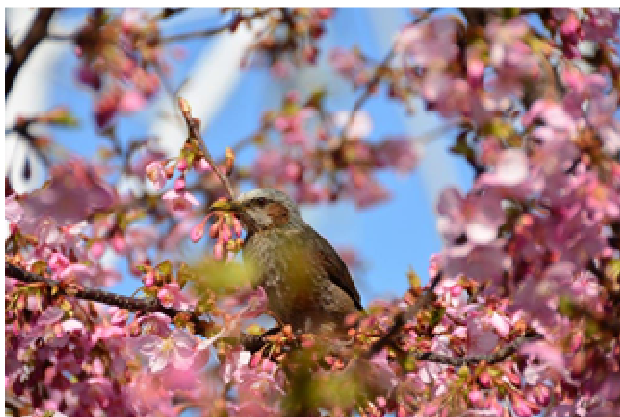
ツグミやヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、モズなど。



何年か前には、カワセミが巣を作った形跡もありました。

左は松ヶ崎城跡の北側の一角を歩く鳥ですが、よく見ると、背中が茶色がかって、目の上に白い線がある。ツグミのようです。ツグミはシベリアから10月頃に日本に飛んできて日本で越冬する渡り鳥だそうですが、3月にはまた北へ帰るようです。

<ツグミ> 2017年2月



河津桜の開花時期にも、いろいろ野鳥が来ます。

花の蜜を吸うのか、鳥が来ますが、左は河津桜の枝にとまったヒヨドリです。褐色の頬の羽毛が特徴的なヒヨドリは、里山でよく見かけられます。

<ヒヨドリ> 2020年2月

撮影：荒井辰男

(付記) 2019年3月発行の「さがせ！ 柏のしぜん」(柏市環境部 環境政策課発行)にも「松ヶ崎城跡公園」として、松ヶ崎城跡の紹介がされています。他にも柏みどりの基金の「カシニワ・ガイドブック」にも松ヶ崎城跡の記事が例年掲載されます。

2020年4月29日(祝・水)に予定していた総会・講演会について

↓

(新型コロナウイルス感染拡大対策として、以下のようにします)
総会は会員に総会資料を郵送しますので、議案への賛否を同封する葉書に記入してご返送
頂く形にして代替、講演会は10月頃に延期します

お知らせ

<カシニワ・フェスタ2020中止>

カシニワ・フェスタ2020が中止になったと発表がありました。ただ通年ガイドブックは5月中に発行され、秋に代替イベントが検討されています。

<会費納入のお願い>

なかなか講座等への出席ができず、会費未納となっている会員の方もいらっしゃるかと存じます。なるべく早めに会費納入をお願いします(下記銀行口座への振込など)。

<会誌「水辺の城」第4号を近々発刊します>

この4月末を目途として会誌「水辺の城」第4号を発刊する予定です。ただ、新型コロナウイルスの関連で印刷スケジュールが遅れる場合はあしからずご了承ください。

<原稿募集>

紀行文や写真、イラストでも、地域の歴史、自然に関わることであれば、何でも結構です。Eメールの場合は info@matsugasaki.jo.net まで。紙の原稿を役員に託されても結構です。

悲しいお知らせです。会員の北 守雄さん、根本 勇夫さんが過日お亡くなりになりました。お二人とも、会の講座や見学会などに参加されてこられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第42号 2020.3.31

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 普通 口座番号3461475